

## 廬隱『女人的心』に見る「不貞」

——言語化のプロセスを中心に——

高屋 亞 希

### 1. はじめに

後期廬隱を代表する長篇小説『女人的心』<sup>1)</sup>は、有夫の身でありながら別の男と戀におち、夫を捨てて家を出た女が主人公となっている。

小説は、主人公の素璞が、友人の紹介で知り合った純土に好感を抱く場面から始まる。結婚後まもなく留學した夫とは、既に3年も會っておらず、素璞は夫の愛情を身近に感じられない日々を送っている。そうした折に知り合った純土からの熱烈な求愛は、たちまち彼女の心を虜にってしまう。二人の道ならぬ戀が世間の噂にのぼり始め、関係を引き裂こうと純土の親から横やりが入ったことから、純土は素璞との戀愛を貫くため、彼女を自分のアメリカ留學に伴う。しかしアメリカに逃れ、純土との戀愛を成就させた筈の素璞は、自らの「不貞」を夫や娘そして母親にどのように言い譯しよう、と罪惡感に悩み逡巡する。これが小説の梗概である。

それまでの廬隱の小説では、戀愛關係へと進む手前で悩む女の姿が繰り返して描かれてきたことを考えると、戀愛の成就に向けて實際行動に移した女が描かれたこと自體、畫期的と言えるだろう。廬隱自身、女性のみが一方的に貞操を求められることに對して異議を唱えたと、この小説の創作意圖について述べているが<sup>2)</sup>、先行研究ではこの廬隱の言葉を引用しながら、戀愛の障壁となってきた傳統的な貞操倫理が、打倒すべき對象として小説に明示されたことを評價するものも多い<sup>3)</sup>。こうした評價に従うならば、素璞が犯した「不貞」は傳統的な貞操倫理に縛られない、自分の自然な戀愛感情に従った個人の勇氣ある行動、として讀まれることになるだろう。

その一方で、素璞が戀人とアメリカに渡った後も、罪惡感を解消したいという一心から夫のもとに戻るなど、彼女の優柔不斷な態度こそが事態を紛糾させ

ているとして、傳統的倫理への異議申し立て、という小説の社會的意味づけが弱められていることへの、否定的評價も見られる<sup>4)</sup>。確かに純土との戀愛の達成を前提として讀む限り、素璞が自身の「不貞」に對して抱く心理的葛藤と逡巡は、戀愛という社會的に正しい行爲を選択するまでの過渡的狀態、として位置づけるほかない。

しかしその場合の讀み手は、夫や親に對して自分の「不貞」行爲をどのように語ったのか、或いは語ろうとしたのか、と要約される素璞の心理的葛藤と逡巡こそが、彼女が自らの意志に基づいて、夫や親ひいては社會に働きかけた唯一の行爲であることを忘れている。夫との關係に漠然とした不滿を持ってはいるものの、自分が求めているものを明確に意識しているわけではない素璞にとって、純土との戀愛と驅け落ちという「不貞」行爲は、飽くまでも男の働きかけによって受動的に形を與えられたものに過ぎない。

本稿では、素璞の「不貞」行爲そのものではなく、彼女が「不貞」行爲を夫や親に向けてどのように語ろうとしているのか、という言語化のプロセスを具體的に検討したい。

## 2. 戀人との出會い

暗黙裡に好意を確認しあうことにとどまっていた純土と、交際への一步を踏み出すことを決意した素璞は、それまでの自分と夫との家庭生活を、純土への手紙の中で、否定すべきものとして明確に對象化している。

私は籠の中の雲雀でした。ある運命の下で、自由を失ってからというもの、私の生活は單調で、煩悶してまいりました。陽光がなかったわけではありません。美しい林が少なかったわけではありません。耳に快い溪流が人の魂を陶醉させ得なかったわけでもありません。ただ自分がそうしたものに與れなかったことを、ひたすら恨むばかりでした。あなたと知り合う以前、私は自分を束縛する生活に慣れていたようです。(p705～706)

純土と知り合うことによって初めて、それまでの家庭生活が自分を束縛するものとして、素璞に意識されるようになったことが伺える。だが具體的にどのような束縛があったかということについて、彼女は明確に言語化しているわけ

ではない。籠に囚われた“單調”な家庭生活が、“魂を陶醉させる”魅惑的な外界と對置されていることから、他の人々が享受している刺激的な體驗から、自分だけが疎外されてきたという缺如感が、彼女の言う束縛だと推測される。彼女がこの束縛を解除して向かう先が、純土との戀愛であることを考えれば、それまでの家庭生活が缺いていたのは、夫との“魂を陶醉させる”ような愛情の交換ということになるだろう。純土との出會いの場でもあった、友人の黎雲夫婦の結婚式<sup>9)</sup>に出席した翌朝の記述は、素璞の缺如感が何であったかを明瞭に示している。

純土の面影が、彼女の意識の中でしきりに浮かんだ。同時に、國を出て3年になる【夫の】賀士のことがどうしても連想されてしまう。異國でどのような生活をしているのか、空閨を一人寂しく守る妻に思い到ったことがあるかどうかは、分からないのだが。ああ、時が過ぎるのはかくも速く、青春は永遠のものではないというのに。だけど賀士は戻ることなど、ついぞ考えていない。この【青春の】美しい時が、あたら別れの悲しみと恨みの心情のうちに、使い果たされてしまう。素璞はこう考えると、思わず新婚の黎雲夫婦を羨望しそうになった。同時にまた、己の孤獨に對しても悲しみを覺えた。【中略】引き出しから賀士の、大きさ4寸の寫眞を取りだし、ちらと見た。だが寫眞の中の夫は、呆然とこうして彼女を眺めるばかりで、もはや彼女の内心の焦りを理解しようとはしなかった。(p693～694)

戀愛結婚を實現した友人夫婦の幸せそうな家庭を、自分には缺けているものとして、素璞が意識していることが分かる。素璞が一人寂しい思いをしている原因は、夫が留學して不在だということにあるが、興味深いのは彼女がそこに夫の自分に對する無關心、ひいては愛情の缺如を見ていることである。つまり素璞の意識の中では、寂しさに對するやり場のない不満が、自分ばかりが夫を想ってやきもきするばかりで、夫からは何ら妻の自分に愛情が示されないという不満へと、攻撃の對象が不在の夫へ焦點化していくのである。だがこの段階では、夫が自分に對する愛情を失っているという認識は客觀的な根據が示されていない以上、素璞の主觀に過ぎず、現實の夫と對話を積み重ねて得られた結果ではない。その意味では妻を“理解しよう”ともしない強權的な夫の像が結

ばれたのが、寫眞という夫の記號であったことは象徴的と言えるだろう。

だとすればこの時、前日に知り合ったばかりの純士が素璞の脳裏に浮かぶのは、こうした愛情を缺いた夫婦關係に對する、不滿の心理的代償であった可能性は否定できない。そもそも素璞が純士と出會った場面の描寫には、彼女が己の家庭にはないと不滿を抱いた“魂を陶醉させる”體驗があったことが、書き込まれている。友人の結婚式に出席した歸り、純士は彼女を家まで送っていくのだが、満天の星空の下、街燈でライトアップした長安街を通り抜けるロマンティックなシチュエーションに二人は“陶醉”し、互いに戀愛感情が芽生える。素璞は純士との關係で“陶醉”を見出した結果、夫との關係にこの“陶醉”が缺如していると見なし、更には夫の自分に對する愛情の缺如を發見する、という彼女の論理化のプロセスが推測できるだろう。但し語り手は“型通りに陶醉”（p693）と記しており、素璞の“陶醉”體驗をありがちなこととして、相對化することを忘れていない。

純士との「不貞」に踏み出すことを、素璞が夢想するようになった矢先、留學中の夫から近況報告の手紙が届く。手紙は“將來の歸國が些か躊躇われる”（p704）ほど、留學先のベルリンでの生活に慣れ親しんでしまったという前置きの後、親しくつきあってきたミリアンという女性と先日も別れる場面があり、大變辛い想いをしたという記述が續く。この手紙だけでは夫の眞意は判然としないが、もしかするとベルリンへの愛着を、友人の女性を引き合いに冗談めかして言った可能性も否定できない。しかし夫の眞意が如何なるものであったかは、素璞にとっては問題ではないだろう。自分が夫を思っ一人寂しくしている間に、夫の方は別の女性と楽しく交際していたという記述自體が、素璞には夫婦間の愛情の不均衡を示す證據となるのである。

ひとしきり泣いた。最後、彼女は突如きっぱりと立ち上がり、その手紙を引き出しにしまった。これについては、賀士の方が最初に彼女にすまないことをしたのだ、と彼女は思った。純士と知り合ったのは、實際は賀士のこの手紙の前だが、自分はずっと感情を抑え、禮を失する行爲はとらないようにしてきた。今、賀士の方がミリアン嬢を愛するようになったのだから、これで私が戀人を作ったとしても、【私のことを】みんな帳消しにし

てくれることができるわ。(p705)

夫の「不貞」行爲に對する非難が、純土との「不貞」を他者に正當化する言説に組み込まれていることが分かる。素璞は先ず、夫の妻に對する愛情の缺如ひいては「不貞」行爲が、彼女の夫に對する愛情の喪失に先行していること強く意識している。夫の「不貞」によって二人の家庭生活そのものが破綻した以上、自分だけその破綻した家庭に對して貞節を守る義務がない、と言っているに等しい。つまり素璞は、純土との戀愛を實現するためには、妻側の「不貞」もやむを得ないと考えているのではなく、夫婦間に貞節の相互性が失われている場合のみ、妻側の「不貞」もまた許されるという論理を構成しているのである。貞節は單なる傳統的倫理規範として意識されているのではなく、夫婦が相互に配偶者に捧げ合わなければならぬ愛情として、近代的戀愛觀のもとに讀み替えられていることになるだろう。言わば「不貞」は、この近代的な戀愛感情を基にした夫婦關係への裏切りとして、素璞に意識されているのである<sup>6)</sup>。

しかし相手を裏切って「不貞」を働いたのは、夫が先か自分が先なのかは微妙な問題だろう。彼女が肉體的に夫を裏切ったことはなかったかもしれない。だが感情的に夫を裏切り純土との戀愛へと傾斜していったのは、彼女自身も認めるように少なくとも夫からの手紙が届く前のことである。素璞の主觀では正當化されていた自らの「不貞」を、實際に他者に對して正當化していくにあたって、夫婦それぞれが働いた「不貞」を巡って、どちらが時間的に先行しているかが問われていくことだろう。

### 3. 交際の發覺

密かに純土と付き合い始めたものの、デート現場を知り合いに目撃され、二人の交際はたちまち噂の對象にされる。それまで素璞の主觀だけで正當化されていた純土との交際は、學友達の間で汚らわしい行爲として語られるようになる。噂を聞きつけた親友が、その噂を知らせようと素璞のもとにやって来て、彼女を慰める。

あなたのような人は絶対そんなことをする筈ないって信じているわ。たとえ戀愛をするにしても、賀士の方との【離婚】手続きもはっきりさせるべ

きだし、こんなふうにもこそ不倫だなんて、あなたや私のような人間にまさか出来るわけがないわ”（p727）

この親友もまた、完全に破綻した家庭でのみ夫婦は貞節を守る義務から解かれる、という素璞と全く同じ認識に立っていることが分かる。ただ夫の「不貞」の可能性については、いまだ素璞の憶測の域を出ないため、親友の方は當然、純土との交際について素璞と認識を共有していない。実際、夫との正式な離婚はおろか、夫婦いずれの「不貞」が先行していたのか、直接に對話することすらしていない素璞にとって、夫の「不貞」は他者に對して客觀的に示すことができるものではない。親友が善意で發した慰めの言葉は、逆に素璞が自身の「不貞」を正當化する言葉を、豫め封じ込めてしまうのである。

素璞は親友の言葉に何一つ辯解できず、ただ泣きじゃくる。親友が歸った後、素璞は一人で自身の行爲について考え、今後どうすべきか悩む。噂ほど酷いものではないと思いつつも、感情の上では夫に背いている上に、初戀の経験すらなかった純土の氣持ちを自分に向けるようしむけた、と素璞は己を“罪人”（p728）として意識する。もしかすると、他者によって語られた像に違和感を覚えながらも、その他者に對して己の「不貞」を正當化できない素璞は、語られた像をそのまま自己像として引き受けてしまうのかもしれない。だがその自己像を受け入れた途端、有夫の身である自分と純土との交際は、あるまじき「不貞」と意味付けられてしまう。他者と對峙することによって沈黙を餘儀なくさせられる状況に、彼女が抑壓を抱え込んでいることが推測される。

彼女はすすり泣きながら、自分はそうやって【純土との関係を終わらせ】、ただ江南女性の懦弱な役立たずぶりを示すだけだと思った。だが内心ではもはや賀土を愛していないというのに、なぜ表面を取り繕い續けていかなければならないのか。【中略】生きている間に生活の核心を掴まなかったら【中略】、人生にその上何の意味があるというのだろうか？素璞はそこまで考えると、眉間にある種、異様な光が浮かんた。彼女は勝ったのだ。噂の力にうち勝ったのだ。【中略】そして一切の眞理に合わない障壁を打ち壊すのだ。こうしてその日一日、噂に悩まされた心はまた徐々に静けさを取り戻した。（p728）

純士との愛情を選ぶことが前景化した途端、動搖していた心が安定を取り戻し、周囲の噂も“眞理に合わない障壁”と對象化されている。しかしこれが、現實の他者に向けて己を正當化したものでないことは、注意する必要があるだろう。素璞の悩みを要約すれば、自分にとって純士との交際は缺かせないものであるにも関わらず、他者には不當な關係として語られるということである。つまり素璞は純士との戀愛を欲する一方で、その戀愛が他者にとっても正當なものであって欲しい、と願っていることになるだろう。現實の他者が眼前から消えることで、素璞は純士との戀愛のことだけを意識し心の安定を得る。だが素璞に緊張を強いる原因そのものが解消されたわけではないため、これ以降も彼女の心は動搖と安定の二つの極を揺れ動くことが豫想される。

自分の行爲を正當なものとして語れず、他者との緊張關係を強いられ、それに抑壓を覺えるという構圖は繰り返される。このしばらく後、純士との駆け落ちを決めた素璞は、同居している叔母に實家に歸省すると嘘をつく。

素璞は突然、心の内に少しやりきれなさを覺えた。自分は今、あたかも演技をしているようで、どんな時でも假面をつけている。叔母に本當のことを言えなかったが、將來たとえ母や子供に會ったとしても、同じようにいくらか事實をねじ曲げて言い逃れるだろう。このような忠實ではない人生が、彼女を恥じ入らせた。時に、良心に押さえつけられて發狂しそうになった。だが愛情はいかなるものよりもずっと力がある。ただ愛情のことを考えさえすれば、一切の憂いが消えた。(p734)

噂を知らない叔母、更には今ここにいない母親や娘といった、言わば想像的な他者を意識することまでもが、素璞に正々堂々と語れず嘘をつかなければならない、罪深い自分というものを意識させている。恐らくそれまで素璞はとりたてて自分を意識することも、母親や娘によって語られるであろう自己像との間に、緊張を覺えることもなかったであろう。それが純士との「不貞」を噂された後は、彼女自身が抱いてきた自己像と、他者によって語られるであろう想像的自己像との間にギャップを抱え込む。その想像的自己像について申し開きできない自分が不自由と意識され、ひいては良心の不自由という罪を感じるのだろう。素璞の意識はこの良心の不自由を解消したいという方向にベクトルが

向いており、悪意に満ちた噂を流す現実の他者と對抗しようとはしない。だがこの己の内面へと向かう素璞の意識が、一方的に語られる対象から他者と對等な立場を回復しようとする、切望でもあることは強調してよいだろう。

それでは「不貞」を正當化するために、素璞はどのようなヴィジョンを描いていたのだろうか。駆け落ち後の記述から、彼女が夫との関係をどのように清算することによって、己を他者に堂々と語りうる立場を手に入れようとしていたのかが伺える。

彼女の最初の考えでは、【留學中の夫に】返信しないという方法で、賀士とミリアン嬢との戀愛を促すつもりだった。【戀愛が成就した】その時には、賀士の方が必ず先に彼女に離婚を申し出る。そうしたら、彼女はすぐ快く彼を許すことができるのだ。（p740）

ここでも素璞は、夫の「不貞」が自分に先行していると指摘しようとしている。先に夫から家庭崩壊の宣告を出させることで、初めて自分も純士との戀愛を公に語ることができる、という素璞のヴィジョンが讀みとれるだろう。この方法は自分の弱みを相手に曝すリスクが少ないというメリットはあるかもしれない。だがそもそも夫とミリアンとの関係が、素璞が期待するものとは異なる可能性も排除できない。また夫が素璞との夫婦関係を清算してミリアンとの結婚を決意するとしても、何時その決着がつくのかは完全に相手任せということになるだろう。

實際、夫とミリアンの交際の行方を素璞は悠長に待ってなどいられない。噂はついに純士の親の耳にも入り、交際を反対された二人は駆け落ちするか別れるかの瀬戸際に立たされる。事情を知る人々から二人の交際は許してもらえないだろうと冷静に認識する純士は、親からの強硬な反対を受けて、自分のアメリカ留學に素璞を同行し異國で新たな生活を築く決意をする。多額の渡航費やアメリカでの生活費の算段まで、その大半を純士が準備し、素璞はそのお膳立てに乗る格好で急遽アメリカへと旅立つ。

純士との戀愛を貫くという素璞の夢は、ここに至って實現に向けて動き出したと言えるだろう。傳統的な貞操倫理に抗して個人の戀愛の自由を勝ち取る、という近代の戀愛物語であれば、小説はここでハッピーエンドを迎えていたか



もしれない。だが純土との関係を他者に向けて正當化したいというこの小説の力學に従うならば、渡米は問題の解決を先送りにしただけと言える。素璞にとっての渡米とは、戀愛の成就への一步であると同時に、夫とミリアンの關係に結論が出るまでの時間稼ぎに過ぎない。

事實、もはや二人の關係を中傷する噂も、仲を引き裂こうとする親も直接届かないアメリカで、素璞は依然として憂鬱な表情を浮かべている。理由を問いただす純土に“あなたときたら身體の自由のことしか分かっていないのね。これまで魂の不自由ということについては氣にかけたことがないじゃない！”(p736)と答える。純土との戀愛という素璞の物語は、自分が他者に引け目を感じる事が無い、“魂の自由”という結末を求めて未來へと先送りにされてしまう。いつまでも結末が見えない物語に、もしかすると素璞自身、愕然としていたのかもしれない。

#### 4. 夫との對決

素璞の物語を終結させるには、一刻も早く夫とミリアンの戀の行方を確かめる必要があるだろう。素璞は自らベルリンの夫のもとに乗り込み、夫婦關係を清算することに決める<sup>7)</sup>。

3年ぶりの夫との再會に、素璞は最初から身構えている。“君には友人が大勢いるそうだね”(p746)という夫の言葉に、素璞は夫が彼女の「不貞」を疑っていることを感じ取る。夫が妻の「不貞」に薄々感づいていた可能性は高い。娘を實家に預けて北平の學校に通っていた筈の妻が、突如“友人の援助でアメリカに勉強に来ている”(p740)という手紙を寄こし、ベルリンの自分のもとにやって來たのである。莫大な費用を要する留學を援助してくれた“友人”が誰なのか、疑っていて當然だろう。自分の弱みを握られないようにした上で、夫とミリアンの「不貞」の證據を掴もうとする素璞の戦略は、實は簡単に見透かされる程度のものであったことが露呈されてしまう。當初の目論みを崩された素璞だが、怯む間もなくミリアンとの關係を皮肉り反撃する。たちまち險惡なムードが漂う中、執拗にミリアンのことを問いただす素璞に、夫は弱みを見透かすかのように自ら先にミリアンとの關係を告白し、妻にも告白を迫る。

“僕らは二人とも今こそ【自分のことを】公表すべきだな。今から正直に言うけど、ミリアンはもう別の人間と結婚した。それに僕と彼女とは単なる友人でしかなかった。君も自分のことを釋明しろよ。”【中略】この時、恐怖と羞恥の感情が彼女の心を満たした。と同時に、彼女は賀士の冷やかな態度に憎悪と憤りを覺えた。純士のもとを離れて彼のところに来るべきではなかったのだ。彼女はこの時少し後悔した。【中略】彼女の睫毛が涙で濡れた。彼女は終始、自分のことを釋明しようとはしなかった。(p747)

夫のこの告白が事實ならば、ミリアンとの結婚を期待する素璞の戦略が無効になる上に、彼女だけが配偶者に對して「不貞」という弱みを抱えていることになる。夫婦關係の破綻は誰の目にも明らかである。だが素璞にとって問題なのは、夫婦のいずれの過失で家庭が破綻したと語るのか、という状況を定義するヘゲモニーの爭奪であるだろう。劣勢に立たされた素璞は泣いて沈黙を貫く。素璞のこの行爲は、夫の「不貞」の證據を新たに見つけだすまでの時間稼ぎとも考えられよう。ここに傳統的な貞操倫理に縛られて、戀人との戀愛を選びとれない女の姿を讀むことはできない。

相手に對して互いに疚しさを抱える夫婦は、虎視眈々と相手の出方を見守りながら、息詰まるような緊張の中で同居を續ける。2ヶ月間が過ぎたある日、素璞は夫の留守中に、ドイツ語で書かれたラブレターとおぼしき手紙の束を見つける。

彼女はラブレターを手にし、心臓がドキドキした。自分は騙されていたのだと確信した。激しい怒りが嫉妬の悲しみをかき亂した。涙が止めどもなく襟元へと落ちた。だが同時に、彼女は嬉しくもあった。これは単なる赦しであるというだけでない。彼女と純士との間の祕密に對するこの赦しがあればこそ、彼女【の心】は【今の状況から】變わり平然とできるのだと思った。(p748)

夫の「不貞」を示唆する證據を見つけ、遂に堂々と語り得る自分を手に入れた、と素璞は喜び安堵する。だが歸宅した夫は妻がドイツ語を讀めないことを承知しており、ただの普通の手紙に過ぎないと言い逃れようとする。素璞はそ

の言葉に納得せず、ドイツ語の猛勉強をして夫の「不貞」の證據を掴もうとする。寢食を忘れるほどドイツ語の解讀にのめり込む毎日が續いた3週間後、彼女の留守中に夫がその手紙を焼却してしまう。夫への憎悪と不信が一氣に噴き出し罵りあいが始まる。その激しい感情のぶつけ合いがエスカレートするうちに、“俺だって傀儡の夫になっているじゃないか！”(p749)という言葉もとび出し、夫婦は互いの疚しい部分を攻撃しあう局面へと再び押し出されていく。

正當化できる立場を得るための夫婦の争いは最高潮に達するが、夫が雙方の體面を考えて追求の手を弛める。一方の素璞も“このまま續けても何の得にもならない”(p749)と判断し、離婚を持ちかける。こうしてもはや修復不可能なまでに憎みあう夫婦は、ついに離婚に至る。だが非がいずれにあったかを確定し得ないこの離婚は、果たして純土との戀愛を他者に對して語りうるものにしたのだろうか。

## 5. おわりに

離婚が成立しもはや争う必要がなくなり、アメリカの純土のもとに戻ろうとする素璞に、これまで必死に隠してきた祕密を明かしてもよいのではと元夫はもちかけ、渡米した経緯を訊ねる。元夫がやはりその點を疑っていたことが伺える。問いかげに答えて、素璞は純土と知り合ったことから今日の離婚を迎えるまでの経緯を長々と語り始める。

偶然にある青年と知り合ったんです。【中略】でも私達は單なる友情だけ。その後、あなたがここでドイツ女性と戀愛しているって噂を聞きました。もちろん悲しかった。でもあなた自らが手紙でミリアン嬢のことを言うまでは、輕々しく信じたりはしませんでした。【手紙の】字間からは、あなたの本心がにじみ出ていました。その時、私は初めて【噂は本當だった】落膽したのです。【中略】後に友人とアメリカに行きましたが、それだって勉強したかっただけのこと……それとこの機會を借りてあなたに会いにヨーロッパに來たかったから。まさか私達が一緒にいた數カ月の結果、【あなたとの關係を取り戻そうという】私の努力が完全に失敗してしまうなんて。あなたの行動にはちっとも誠意というものがないのよ。【中

略】もう全てがおしまい。（p751～752）

素璞は己を正當化する語りを手に入れているように見えるかもしれない。しかしそれは、自らにもあまり觸れられたくない事情があり、且つ薄々感づいていたことを告白によって確認しているだけの夫が、元妻による「不貞」の事實関係を敢えて追求しなかつただけのことであろう。渡米が夫との離婚前であることは事實であり、その渡米を援助してくれた“友人”とこの後に再婚したとあっては、渡米以前の二人の関係を周囲に疑われても仕方がない。互いに觸れられたくない事情を抱えた者同士だからこそ、元夫に対しては辛うじて己を正當化して語り得たことに、素璞はまだ氣づいていない。

素璞は自分の告白と引き替えに、執拗にミリアンとの「不貞」の事實を元夫の口から聞き出そうと、彼女との結婚の時期を尋ねる。だが元夫が明かした「不貞」は、素璞が期待していたものとは全く異なる。

君がミリアンのことを疑うのは全くの誤解だよ。彼女は本當に別の人と結婚したんだ。だけど今、別のガールフレンドがいて、彼女は僕によくしてくれている。もしかしたら將來は結婚するかもしれないけど、今はまだ何とも言えない……（p752）

ミリアンとの「不貞」を前提にして、家庭崩壊の原因は夫側にあると主張する素璞の論理は、夫のこの告白によってあっさりと、その客觀的根據を失ってしまうのである。純土と再婚した素璞が、やがてアメリカから中國に歸國して親や娘と對峙した時、他者に對して己を正當化するこの根據を巡って、再び問題が出てくるのが豫想される。ここに至っても、己を他者に語りうるものにしてしようとする素璞の物語には、いまだ結末が見えない。素璞が踏み出した「不貞」への一步は、純土との戀愛を實現するために行き着いた結果である以上に、他者に語られる醜惡な自己像を取り消そうとする、終わりのない戦いの始まりだったのである。

註

- (1) 「女人的心」は1932年『時事新報・青光』に連載。1933年6月上海四社出版部から單行本を刊行。本稿での使用テキストは、『廬隱小説全集』（時代文藝

出版社、1997年3月)を使用した。

- (2) 『廬隱自傳』は1934年6月上海第一出版社から単行本を刊行。本稿では『廬隱散文(二十世紀中國文化名人文庫)』(中國廣播電視出版社、1993年6月)を参照した。
- (3) 例えば、劉思謙『“娜拉”言說——中國現代女性作家心路紀程』(上海文藝出版社、1993年12月)では、戀愛という自然な感情が貞操倫理を強いる現實の他者ではなく、素璞自身が内面化した貞操倫理という主觀的要因によって抑壓されている構圖を指摘。この構圖を對象化している以上、書き手の廬隱のレベルでは、この内面化された貞操倫理觀から解脱しているだろうと推測している。
- (4) 郭志剛主編『中國現代文學書目匯要(小説卷)』(書目文獻出版社、1994年12月)は、離婚したにも関わらず良心の呵責から元夫のところに戻る等の、再婚後の素璞の心理と行動について、過失は客觀的なものではなく彼女自身にあるため、小説に貞操倫理批判等の積極的な社會的意義を見出すのは、難しいと評している。
- (5) 新婦の黎雲は既婚者だった海文との3年間の「不貞」關係を経て、海文の離婚成立によりようやく戀愛を成就させた、という設定になっている。2組の「不貞」カップルを巡って、冒頭のこの結婚への周圍の祝福ぶりと素璞の語られ方の違いは、きわめて對稱的といえるだろう。
- (6) 『女人的心』に限らず、男女が互いに捧げ合う愛情・貞操が不均衡を起こす事態が、廬隱の小説では繰り返される。この點については、拙稿「廬隱《象牙の指輪》に見る戀愛の技法——イエスとノーのはざままで」(『中國文學研究』第24期、1998年12月)を参照されたい。尙、貞操倫理を夫婦雙方が相手に對してさし出す愛情として讀みかえること自體は、既に20年代から盛んに議論されていたが、この點については梁景和『近代中國陋俗文化嬗變研究』(首都師範大學出版社、1998年12月)に詳しい。
- (7) 素璞はベルリンの夫のもとに戻るにあたって、己を語り得るものにするシナリオを幾つか用意している。そのうちの1つは、自分は夫との關係を修復するよう努力し、純士には新しい戀人を探すよう提言、純士との關係は生涯の思い出として位置付けるといものである。そもそも純士との關係を正當化するための試行錯誤であった筈のものが、周圍に對して語りうる自分を手に入れることが、最重要の課題だと意識することによって、轉倒をおこしてしまうことが推測される。純士はこのような素璞の提案に對して不快感を抱くが、最愛の彼女の希望を入れることも愛情だと考え、彼女のベルリン行きに同意する。尙、純士が素璞に對してどのような視線を向けているかについては、紙幅の關係で論じなかった。